

藤兵衛、馴染みの絵師 に謎の武士と酒盛りを するの巻

とりなんこつ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大江戸騒動記／棟平屋の軌跡／の三次創作になります。

原作者である社畜のきなこ餅様のご厚意により、公開させて頂きます。

今回は歴史上の人物が出てきており、多分に独自解釈がなされております。また、時
系列的に明らかに矛盾しているところが多くありますが、そこはやはり『時代劇』とい
うことでのうか、どうか…。

目

次

藤兵衛、馴染みの絵師に謎の武士と酒盛
りをするの巻

1

藤兵衛、馴染みの絵師に謎の武士と酒盛りをするの巻

「どうか一族郎党ともども、今後とも息災でありますように」

二拝二拍手をしたあとにそう強く強く祈り、最後に深々と一拝。

「どうれ、これでようやくお参りは済んだの。のう、新右衛門？」

儂こと棟平藤兵衛の声に、斜め後方に控えた新右衛門が頷く。

振り返った王子稻荷神社はすごい人混み。それもそのはず、今日は初午祭りである。
転生してきて分かつたことじやが、江戸つ子のお祭り好きは尋常ではない。それこそ
毎月毎週、どこぞで必ず縁日が立ち上がり、お祭りが行われている感じ。

境内からずらつと物売りの屋台や茶店が並んでいる。

芸を披露したりする者、辻商いみたいな連中もたくさんいて、多くの人が足を止めて
見入っていた。

「さあ、皆さん、御立合い御立合い。こちらのタコの吸い出しが、そんじやそこらのもの

とはちよいと違つて…」

人の輪の奥から、辻商いのセールストークが聞こえる。

「タコといえば、そうそう、そういえば、あやつの所に向かう途中じやつたわ
儂がポンと手を叩いて当初の目的を思い出していると、すぐ横で新右衛門が言つてくる。

「そもそも大旦那様が急に稻荷を参詣しようと寄り道をされたわけで

「すまんすまん。じゃが人生にはもそつと余裕が必要じやよ？」

渋い顔つきになつている新右衛門の気持ちは分からんでもない。

儂の護衛を務める以上、あまり人混みの中にいるのは避けたいのじやろう。懷中のものにも気をつけんといけんしな。

それでも儂は屋台をつぶさに眺めて行く。

食い物系が多いが、縁起物や植物、手製の工芸品を売つてゐる店も多い。

売れなきや飯が食えないわけだから、それぞれが工夫を凝らしている。

儂をしてあつと驚くものを見かけることもあるし、新たな商売のタネは意外とこんなところに転がつてゐるもんじや。

しかし残念。特に真新しいものはなく、儂が最後に足を止めたのは境内の隅にほど近い、何とも愛らしい姉と弟の小さな小さな出店。

初午祭りということで、木彫りの馬がいくつか売り台に並べられておる。不揃いだが
どれも丁寧に彫られていて、つぶらな瞳がなんとも愛らしい。
ふむ。これは藤太郎への土産にちょうど良いかも知れんな。

「どれ。これを一つおくれ」

「ありがとうございます！」

顔を輝かせる姉らしき少女は、かなりの美少女じやつた。

もつともこれは儂基準じやから、現在の江戸基準では残念な容姿ということになる。
まあ、もそつと大きくなつてからが楽しみじやて。

代金を払い、木彫りの馬を受け取つて袂に仕舞い込み、少し離れた茶屋で新右衛門と
一休み。

腰を落ち着けて茶と名物の団子を味わつてゐると、例の姉弟の店が良く見える。
どうやら儂が買つたのを皮切りに、ちらほらと売れている様子。

うんうん、良かつたのう、などと思つていたら、急に怒声が轟いた。

「おまえら！ 誰に断つてここに店を出してやがるんだッ！」

見れば、揃いの羽織りを着たチンピラどもがワラワラと。

「わ、わたしたちはきちんとこの神社の宮司さんから許可を貰つて…!!」

「ああ？ ここいらは鳴神一家の仕切りつて決まつてんだよ！」

鳴神一家。つまりは香具師の元締めか。

縁日とか祭りの屋台つてのはそもそも地元ヤクザのシノギじやからね。

「挨拶もなしに勝手に店を立てるなんざふてえ話だ。とつととショバ代を払いやがれ。な？」

厳つい男どもの恫喝に、姉弟は震えあがっている。行き交う人も遠巻きにするだけで止めようとはしない。

そして儂も、こと商売に関しては口を出せん。

明らかにあの姉弟がルール違反をしているならば、理はチンピラどもにある。
されど。

「そ、そんなお金なんて：！」

姉が震える声で答える。

「おらあッ！」

チンピラの一人が売り台をひっくり返し。

「へッ！　だつたらてめえの身でも売つぱらつて払つてもらおうか！　ひでえ不細工だ
が、飯焼きくらいには使つてもらえるだろ！」

リーダー格らしい男が、姉の顔を無造作に掴んで悲鳴を上げさせている。

新右衛門

「はツ」

すぐつと新右衛門は立ち上がる。

コキコキツと首を鳴らしながらリーダー格に近づくと、

「なんだてめえは?! …つてあだだだだッ!!」

目にも止まらぬ動きで男の手首を捻り上げている。

自由になつた姉が弟を抱えて後ろに下がると、そこからは新右衛門無双じや。襲い掛かってくるチンピラどもの攻撃を躱し、まさにちぎつては投げちぎつては投げ。

まだ全然本気じゃないのは分かるんだけど、アイツ、CQCにさらに磨きがかかってね?

されど、チンピラ二人の腕を同時に捻り上げた時じやつた。

背後から、別のチンピラたちが三人まとめて新右衛門に躍りかかる。

「危ない!」

と、さすがに儂も肝が冷えた瞬間。

体格の良い男が割つて入り、その三人のチンピラを投げ飛ばす。その手際の鮮やかなことよ。

「たつた一人に寄つてたかつてとは、おまえらそれでも本当に男か!?」

実際に渋い声の大喝に、チンピラどもは明らかにひるむ。

「…くッ！
てめえら覚えてやがれ！」

一番最初に新右衛門にワンパンを貰つたリーダー格が捨て台詞を残して逃亡。残つたチンピラたちも覚束ない足取りで逃げ出せば、遠巻きにしていた参拝客から新右衛門と体格の良い男に拍手と歓声が上がつた。

その声を背に、儂は姉と弟たちに近づいて話しかける。

「やれやれ、これで分かつただろう。地回りのヤクザどもに、筋も通さず楯突いちやいけないよ？」

「…は、はい」

涙目で抱き合う二人に、儂は笑いかける。

「どちらにしろ、もうここいらで商売はせんほうがいいじゃろうて。どれ」

散らばつた馬細工を拾い上げて、それから儂は近場の棟平屋系列の店の場所を教える。

「これを持つてその店へとお行き。儂の指示だと言えば、番頭が全部買い上げてくれるじやろ」

姉が茫然と見上げてきた。

「…旦那さまは、なんでわたしたちにこんな…」

「なあに、儂は子供を苛める大人が大嫌いなだけじゃよ」
この姉弟たちのことはこれで良し。

振り返れば、新右衛門がやや憮然とした顔で佇んでいる。

その隣には助けに入ってくれた例の男。身形からしてお武家さまらしいのだが。

「義を見てせざるは勇無きなりと思つたが、少々差し出がましかつたかな？」

朗らかに笑う偉丈夫に、いえいえこちらこそ助かりました、と儂は頭を下げようとし
て凍り付く。

この偉丈夫——野生の谷橋秀樹だった。

ゴクリ、と鳴つたのは、儂が唾を飲み込んだ音。
やべえやべえよ……。

ぶつちやけ桃太郎か金四郎か平四郎か清三郎か。

それが問題じや。

それによつては悪人スレイヤーからジエノサイダーまで範囲が広すぎる。

戦慄する儂の内心を知つてか知らずか。

「では、拙者はこれで

身を翻そととする偉丈夫を、儂は咄嗟に呼び止めていた。
「御礼というわけではありませんが、そこいらで一献差し上げたいのですがいかがで
しょう？」

というわけで、正体不明のお武家様と並んで神社の境内を出る。

背後に付き従う新右衛門があからさまに不満な顔つきをしていたが、儂にも言い分があるんじやよ！

ここで迂闊に別れて、あとになつてからお白洲とかに引き出されてさ、『あ、あんたはあの時……!?』なんて再会と展開は絶対にノウツ！

まあ儂は儂でそんな後ろ暗いことはしてないつもりだけど。きつと。多分。メイビー。

それに、さつきからこのお武家さまに名前を尋ねても『名無しの権兵衛でいいだろう

?』ってはぐらかされるんじやもの。

仕方ないから心の中ではヒデキ（仮）と呼ばせてもらおう。

こうなれば酒を飲ませて酔つ払わせて素性を確かめるとともに、知人な関係になつてしまおうという魂胆である。

友人になればなおベターじゃ。

「さあて、どこの飲み屋にしよかのう?」

ここいら界隈で、懇意にしている店は結構ある。例の隠れ家的な料理屋で一杯と洒落こむのも悪くない。いつそ二ツ目橋の軍鶏鍋屋の五鉄まで足を延ばして……。

そんな風に少しだけウキウキしている儂の耳元に、新右衛門の灰汁を煮詰めたかのような苦い声が。

「大旦那様。当初の目的を思い出されては……」

おお、そういえばそうじやつた。

そもそも儂はこれから知人を尋ねに行く途中じやつた。

どうも最近忘れっぽくていかん。そろそろ齡かのう……なんて考えていた儂に、天

啓が閃く。

こちらから行く先にいるあやつも、いっぱいの有名人。

いつもそいつも巻き込んで酒宴をすれば、一石二鳥じやね?

人伝に聞いて歩いて到着したのは、墨田川沿いの一軒家じやつた。

外觀はまさにあばら家つて感じで、幽靈が出ると言われても違和感はない。

「……んなところに誰ぞ住んでいるのか？」

大人しくついてきたビデキ（仮）もさすがに不審そうに太い眉をよせている。

「いるんですよ、物好きなヤツがね」

笑つて儂は立てつけの悪い引き戸を開ける。

「お邪魔するよ」

そう声を掛ければ、正面の座敷のコタツに足を突っ込んだまま、ぼさぼさの総髪の男が怒鳴り返してくる。

「ああっ!?　米代なら竈のとこの巾着から勝手にもつてきやがれ！　こちとら忙しいんだよ！」

卓上の手は、絵筆を握つたまま止まらない。

儂以外が啞然とする中、総髪の男は髪を振り乱しながら顔をあげ、こちらを見た。

「つて、おう！　藤兵衛じやねえか！」

歯を剥き出しにして笑みを向けてくる男に、儂も泰然と笑い返す。

「久しぶりじやの、北斎」

葛飾北斎。

いま江戸でも指折りの浮世絵師であり、希代の変人である。

「相変わらずの住まいじやの」

六畳ほどの座敷は、中心にコタツを据えて周囲はゴミで埋め尽くされていた。

新右衛門に謎のお武家様も目を見張っているのだが、これは転生者である儂とやら価値観が異なる部分があると思う。

というのも、江戸つてすごいリサイクル社会なのね。

着物は大抵古着屋から買うし、新しい服はよっぽどの時じやなきや作らない。

その古着だつて、最終的には雑巾とかにして擦り切れるまで使うし、あんまりゴミを出すつて考えがないみたいなのよ。

なのに北斎の家はまさにゴミ屋敷つて感じなもんだから、汚いとかいうよりむしろゴミが大量にあることに驚いている感じ？

なので僕としては汚いな、ちゃんとゴミは捨てろよ？ と思うくらいであまり嫌悪感はない。むしろちよっぴり感慨深かつたり。

転生前の記憶で、ネットゲームにクソハマリしていた友人の部屋がちょうどこんな感じじじやつたもの。

それに、北斎はボトラージやないから多少はね？

「まあ上がれ上がれ」

勧められて、僕は遠慮なく上がり込む。

「どつこらせ」

コタツの対面に腰を下ろし、新右衛門に持たせておいた土産を渡す。

「ほれ。大福餅を持ってきてやつたぞ」

「かっかけねえ」

大喜びで大福を頬張る北斎は相変わらず甘党じやのー。

「おー、そういえば以前おまえから頼まれていた絵札が出来ているぞ？」

「ごそごそと横の紙束の山を漁り、北斎は卓上に五枚のカードを広げる。

『この五つが組み合わさって一枚の立ち絵になるってえ発想はすげえな。』『封印されし

「目くそ鼻くそ』だつけか?」

「封印されしエクゾディア、な」

ふむ。だいぶ和風にアレンジされているが、なかなかにカッコいいデザインにまとまつたの。

「新右衛門、どう見る?」

「拙者には鳥居強右衛門の旗指物のように見受けられますが……」

「なるほど。似ているやも知れぬな」

ヒデキ（仮）も熱心に頷く。

せっかく自慢したのに、この反応に儂傷心。

うーん、やっぱりこの時代の感性にはちと早いのかも知れんの。

新右衛門なんか、一緒にデュエルしようぜ! つていくらルールを教えても理解できんみたいだし。

こんど吉原の太夫と遊ぶときまで仕舞つておくとするか。

カードを紙入れに大事に仕舞い、これまた新右衛門に持たせておいた貧乏徳利と折詰を卓上へと載せた。

どちらもここへ出向く途中の居酒屋で買い求めてきたもの。

「なんだあ宴会でもしようつてのか? おいらア下戸だぜ?」

「そんなことわかつとるわ。儂らが飲むからおまえは食えばいい。どうせ、常日頃ろくなもんを口にしとらんじやろ?」

しかし、本当に皿とか食器も何もない家じやの一。

箸は居酒屋から貰つたものでいいとして、お、茶碗はあつた。文字通り茶碗酒といくか。

「新右衛門は分かるが、こつちの旦那はなんなんでえ?」

おそるおそるコタツにつく儂以外の二人を眺め、北斎はあごをしゃくる。

「ああ、こちらのお武家さまは」

「権兵衛だ。そう呼んでくれ」

ちつ。流れ的に口を滑らせるかと思つたけれど、このヒデキ(仮)、手強い。

「へえ、藤兵衛と権兵衛つてか? くはははっ!」

北斎が笑う。相変わらず笑い処のツボが分からんやつ。

まあ、そんなこんなでなし崩し的に酒宴が始まった。

「まずは一献。権兵衛殿」

大福と厚揚げの煮しめを交互に頬張る北斎を横目に、儂はヒデキ（仮）の茶碗に酒を注ぐ。

「かたじけない。：：しかして、藤兵衛殿。こちらの御仁は本当に：：？」

うん、言いたいことは分かる。巷で大人気の絵師がこんな素つ頓狂な性格をしていることなど知る人は少ないからの。

なにせ衣・食・住の全てに無頓着な生活破綻者じやもん。

そのくせ氣に入らない仕事は10両積まれても引き受けない偏屈者で、掃除するのが面倒じやからとゴミがいっぱいになるたびに転居を繰り返す面倒臭がりでもある。

今日も儂がわざわざ人伝に尋ねまくつてこの家を探し求めたのも、その奇矯に由来している。

反面、芸術家としては一流なことはいうまでもない。好奇心は人の十倍はあろうか。

儂がダメ元で依頼したカードの執筆で、漠然とこんなデザインで、と指示したら喰いつきが凄かつた。ガチのマジで丸三日質問攻めにあつて、家に帰れなかつたくらいじやもの。

齡が近いこともあつてか、爾來、なんだかんだと付き合いを重ねて現在に至る。友人というと口幅つたいけれど、実に面白い男じやと思う。

「あ？ おいらが葛飾北斎と思えねえってのか、権兵衛さんよ？」

そう凄まれて口籠るヒデキ（仮）こと権兵衛殿。

「ふん…」

と鼻を鳴らし、北斎が卓上に広げたのは、かの有名な『蛸と海女』。

されど微妙に構図と構成が違うその春画を目の当たりにし、ゴクリと喉を鳴らしたのは新右衛門と権兵衛殿も一緒。

両名とも、いきなり完全無修正のエロ本を見せられたみたいなもんじやろうからなあ。

「藤兵衛、てめえに言われた通り第二弾つてヤツを描いてみたんだが、どうだ？」

「ふむ。素晴らしい出来だと思うぞ？」

口にした台詞はお世辞ではない。しかし、元現代人である儂として全く興奮出来ないのはしようがないところ。

この時代とは美的感覚や価値観が違うから仕方ないね。

つか、こんな絵面の二次元嫁とか嫌だなあ…。

それでも、江戸時代としてはインパクトのあり過ぎる絵だつたに違いない。

特に背景に海女と蛸の台詞を書いたところあたりとか。

北斎はとにかく斬新で過去の価値観に縛られることはない。

なので儂に全く絵心がないのが悔やまる。

仮に儂に美樹本晴彦やうたたねひろゆきばりの画力があれば、北斎の助力を得て、江戸っ子男子啓蒙作戦は大躍進を遂げていたことだろう。

まあ、無い物ねだりをして仕方ないか。

なので、儂の知つている現代知識を適当に提供して、監修をさせてもらつていい。

「ところで藤兵衛よ。ここの海女の台詞なんだが。女つてのは実際に『らめえ』とか『りゅううう』なんて言うのか?」

「あー、言うよ。結構言う言う」

「それとよ、おいらの描く新しい四十八手図に『だいしゆきほおるど』つてのを追加しろつて言つてたよな」

「うむ。そうしておけば遙か未来の惨事は回避できるやも知れんと思つてな」

「なんだそりやア?」

夢を見た。

夢じやなきやこんなこと実際にあり得ないなんて思つても、夢で見ているときは違和感を覚えない。そんな夢。

そんな儂の前には、ガチャガチャがある。百円を何枚か投入して、レバーを回してカプセルが出てくるあれじや。

しかし、そのデカさは尋常じやない。

カプセルの排出口が儂の背丈より大きいことから、その大きさは想像できるだろうか。

そしてその巨大過ぎるガチャガチャには、商品のサンプルの写真などはない。代わりの無地の紙に、でかでかとこう書いてあつた。

『ヒデキガチャ』

普通に考えれば胡散臭いことこの上ないのだが、もちろん夢の中の儂は当然のようにレバーを回している。

ガチャコン！ と大きな音とともに、排出口から巨大なカプセルが転がり出てくる。ころころと転がつたカプセルは、儂の数メートル前で停止。パカッと呆気ないほどカプセルが開き、そこから出て来たヒデキは――。

なんじや、Y M C A つて！ そりやヒデキ違ひじやろ!? 踊るな！

だいたい Y M C A つてなんぞ知つてゐるのか!? ヤングマン・キリスト・アソシエーションつて、キリスト教青年会のことじやぞ？

つか、切支丹じやねーか！ 切支丹と伴天連は追放じやー：! ！

カツ儂は目を見開く。

目が覚めてすぐになんぞ腹が重苦しいと思つたら、ビデキ（仮）が儂の腹を枕にいびきをかけていた。

「つたく、なんちゅう夢を見たんじや。」

原因はまつたくこのビデキ（仮）にあると思うんじやけど、あれだけ飲ませてもどうとう権兵衛のまま口を割らなかつたのう、この御仁。

未だ正体は不明のままだが、儂と北斎の艶談義には熱心に聞き入つていたし、北斎秘蔵の春画のラフも食い入るように眺めていたからの。

新右衛門と同じでむつり助兵衛つてヤツで、一応弱みは握つた感じ？

ちなみに、がつり助兵衛、しつかり助兵衛というのは、儂こと棟平藤兵衛の異名ぞ。「う、む…。大旦那様。お目覚めですか」

新右衛門も上体を起こせば、

「ぬう？ こ、これは失礼したつ」

儂の腹に頭を預けていた権兵衛殿も身体を起こした。

「おう、いま何時分だ？」

左手で顔を擦りながら北斎も目を覚ました様子。

でも、右手が自動手記みたいに勝手に絵を描いているのは怖いからやめれ。

「どうやら明けて、五つ（午前9時頃）というところでしようか」

遠く寺の鐘の音を聞き分ける新右衛門イヤーは地獄耳。

「これはとんだ長居をしてしまつたな。拙者はここいらでお暇させてもらおう。いや、世話になつた。楽しかつたぞ」

腰に大小を差し込んで権兵衛殿が立ち上がる。

「それじやあ新右衛門、儂らも帰るとするか」

一応、先日は泊りがけになるかも、と言いおいての外出だつたが、さすがに昼過ぎまでには戻らんと家のものも心配するだろう。

同時に、この権兵衛殿と帰りを一緒にして、住んでいる場所を突き止めて正体を突き止めたいという思惑もあつたり。

「そいじや、おいらもちよいと散歩にでもいくかね」

なんと北斎までコタツから出てきたのには驚いた。

「偶にやあ外の空氣も吸わねえと、尻に根っこが生えちまわあ」

男四人で雁首を揃え、墨田川を離れてぶらぶらと歩く。

「…なぜ拙者について来るのだ？」

「いえいえ、たまさか帰り道がこつちなのですよ」

桜田門を横目に進み、半蔵門も通り過ぎる。

そこから更にしてくてくと歩けば、牛込——現代でいうところの新宿辺りかの。するとほどなく立派な一戸建てが見えた。どうやらそこが権兵衛殿の住処らしい。

儂はさりげなく表札の名を読み取る。

『中山』。：知らんのう。儂の知るヒデキとは結びつかんぞ。

儂が首を捻りつつ、権兵衛殿が邸宅の入口に立つた時じやつた。

敷地の中から、女中らしきものが転がり出てくる。

「旦那さま！　ああ、ようございました！」

「なんだ、どうした？」

「今朝、菅野様がこれを…！」

「菅野殿がっ！」

何やらしたためられた手紙を受け取り、権兵衛殿はバサツと広げる。

それに素早く視線を走らせたと思ったら、上げられた顔は完全に色が変わっていた。

「…しまったつ！」

短く吐き捨てるように言うと、血相を変えて走り出す。

儂をして、さっぱり状況が読めん。

読めんからこそ、儂は権兵衛殿の後を追う。

儂が走れば新右衛門もついてくる。

北斎まで面白そうに走つてきているにはびっくりじゃ。

そして権兵衛殿というとよほどの一大事らしい。一心不乱に走る様子は、背後を振り返つて儂らがついてきているのを確かめる余裕もないほど。

そのまま息を咳切らせて走り続け、大久保を抜けたあたりじやつた。

突つ走る権兵衛殿行く手に、わらわらと男衆の姿が。

その先頭にいる男に、儂は見覚えがあつた。

「一晩中江戸を探し回つてようやつと見つけたぞ、てめえら…!!」

先日、王子稻荷で新右衛門と権兵衛殿に懲らしめられたチンピラどものリーダー格。確か鳴神一家といつたか？

いくらヤクザは舐められたら終わりといつても、繩張りは違うし、執念深すぎじやろう！？

チンピラ集団は、明らかに昨日より数が多い。おまけに全員が獲物をもつて完全武装。

「ええいっ！ どけどけいっ！ 拙者には貴様らに搔かずりあつてている暇はないのだツ

！」

「うるせえッ！ 昨日の恥をかかされたケジメはしつかりとつけさせてもらうぜえ：！」

懐から取り出した匕首にじつとりと舌を這わせるリーダー格。

次の瞬間、その横っ面に、新右衛門のジャンピングニーパットが炸裂した。着地する寸前、横蹴りで別のチンピラも蹴り飛ばし、その反動で対面のチンピラへも体当たりをかましている。そこには先日の油断はない。

間髪入れず儂は叫ぶ。

「権兵衛殿！ ここは新右衛門にお任せを！」

「すまぬ！ 恩に着るつ！」

言いおいて、権兵衛殿は全力疾走。

まあ、今のデストロイモードの新右衛門なら大丈夫じやろ。そう思つて後を追いかけようとしたら、別のチンピラに絡まれてしまつた。

「おつと、そこの爺イまで逃がさねえぜ！」

爺イなんて呼ばれる齡じやないもん！ まだ若いもん！

そう言い返せればカツコよかつたが、あいにく儂の戦闘能力は限りなくゼロ。

新右衛門は他の連中で手一杯で、あれ？ これって儂はドキドキするほど大ピンチじゃね？

そう思つて冷や汗を流していると、いきなり目前のチンピラが悲鳴を上げた。
いつの間にかチンピラの背後に来た北斎がその肩あたりを掴んでいるんじやけれど、
チンピラの痛がりようが尋常ではない。

「なあ、藤兵衛。こいつらは悪党つてやつか？」

「そ、そ、そ、う、じ、や。年端も行かぬ子供たちをいびる口クでなしどもじやよ」

「そ、う、か。な、ら、遠慮はいらねえなあ」

北斎はニヤリと笑い。

「…ひぎやあああああああああああああッ!?」

チンピラの更なる絶叫が響き渡る。

「どおれ、ここは新右衛門とおいらに任せておきなつ！」

「頼むぞツ！」

急いで権兵衛殿を追いかけるべく走り出す。

一度だけ振り向いたら、なんかチンピラどもが手足をブラブラさせて地面に転がつて延々と悲鳴を上げていた。

あとで聞いた話なんじやが、北斎のやつ、人体を描くには構造も熟知しておかないと

！ と江戸の有名な整骨師のもとで修業を積み、骨子術とかまで身に着けていたらし
い。

念仏の鉄かよ。

ようやく権兵衛殿の足が止まる。

息も絶え絶えに迫いついた儂の視界に入る石碑には、「高田馬場」と刻まれていた。
「：間に合つた」

わずかに乱れた呼吸を整え直しながら権兵衛殿が呟く。

どうやら目的地はここらしい。

ぜーぜー言いながら見れば、馬場の中は物々しい雰囲気じや。
侍同士がたすき掛けに額に白い布まで巻いている。

「と、藤兵衛殿！ たすきを持つてはおらんか!?」

不意に権兵衛殿が叫ぶ。

「たすき、ですか」

まあ、帯とかでも代用できなくない。

しかしこの権兵衛殿はかなり体格もよく、儂のしている止め帯では明らかに寸足らず。

だからといって、代用になるものなぞ…って、あ。

「…一応、似たように使えるものはございますが」

「構わん！　一時で良い、貸してくれ！」

「しかし、これはあくまでたすきではないのですじや。それでもよろしいですかの？」

「構わんと言つておる！　武士に二言はない！」

そこまで言われてしまえば是非もない。

儂は袂の奥からとつておきを取り出す。

——それは、艶事において様々な異名を欲しいままにする儂のエチケット。

一晩で複数の店や妾を渡り歩く際の必需品。

果たして、儂が差し出したものに、権兵衛殿は目を見張る。

「ふんどし…だと…？」

「一応、新品の尾州木綿ですが」

「ぶ、武士に一言はないと言つただろう!?」

ふんどしを引っ手繩り、ビリリと破つて結んで長さを補い、たすき掛けを始める権兵

衛殿。

一人でするときは布の片方を口に加えて押さえなければならないので、少し涙目になつてゐるのがちよつと可愛い。

「…助かつたぞ、藤兵衛殿。この礼は、まだ後ほど」

そういうつて颯爽と馬場の中へと足を踏み入れた権兵衛殿の背中は、惚れ惚れするほど男らしいものじやつた。

しているたすきは儂のふんどしだけどな。

そして間もなく、馬場の中で凄惨な決闘が開始された。

この期に及んでようやつと儂は権兵衛殿の正体に気づく。

中山武庸こと中山安兵衛。

のちの堀部安兵衛で、この決闘はかの有名な高田馬場の決闘だつたのじや。

ヒデキ（仮）こと権兵衛こと後の堀部安兵衛殿は、決闘相手の三人を豪快にぶつた斬り、見事勝ちを納めた。

この決闘が大変な評判を呼び、堀部家に請われて養子入りしたのが堀部家としての安兵衛の始まりだという。

実に様々な講談や芝居の題材になつた決闘じやが、新右衛門や北斎が叩きのめしたチンピラまで何故か斬つたことになつてカウントされ、18人斬りとか喧伝されたのはさすがに盛りすぎじやろ？

それと、色々と落ち着いてから礼がてら安兵衛殿が儂の店にやつてきて、新品のふんどしを返してくれた。

こつちは講談のネタにならないまま、永遠に歴史の闇の中へと葬り去られることを祈る。

ちなみに、たすきにした元のふんどしの行方を尋ねたら、家宝にして額縁に入れてしまつておくとのこと。

いや、もうほんと勘弁してください…。

そこで、それらも落ち着いてしばらくしたのち。

奥の座敷で色々と打ち合わせをしていた儀だが、なんとも店先が騒がしい。
「どうしたんじや？」

暖簾をかき分けて顔を出すと、如何にも浪人という風情の男が上がり框に腰を下ろしている。

儀に気づくと、総髪をざんばらに括った頭で振り返り、野性的な笑みを向けてきた。
「おう、おぬしがここのお主人か！ どうだ？ 僕を用心棒としてやとわんか？」

——野生の薬師叶司だった。

「ま、まあ、秀樹も出たしね？」と、啞然とする儀の隣で、新右衛門はそつと耳打ち。
「かなりの腕前かと」
うん。知っている。

黒い着流しに黒い袴。腰に吊るした刀は、実戦刀の同田貫。

「おつと、名乗るのが遅れたな。俺の名は久慈慎之介といふ

やつぱり千石さんじやないですかやだ！」

いや、決してこの人は悪い人じやないのよ？

むしろ筋は通すし熱血漢な人よ？

でもこういう展開つて、結局は雇い主の方が悪事を働いていることに気づいて表替ええつて、三四ともどもなだれ込んできてKILL! してくる流れじゃん?!

儂としてはそんな悪事を働いているつもりはないけれど、逆に儂が無念にも殺されて、その敵討ちに三四がKILL! な展開も良くあるパターン。

ゴクリと、儂は唾を飲み込む。

ここは関り合わない方が勝ちじや。

されど、どうやつて断つたものか。

「どうだ、主人? これほどの大店であれば、用心棒も多いに越したことはないのではないか?」

ん? ん? とこちらを見てくる千石さんに覚悟を決めた。

儂は、につこりとしてこう言ってやつたさ。

32 藤兵衛、馴染みの絵師に謎の武士と酒盛りをするの巻

「
S
h
a
l
l

w
e

ダ
ン
ス
?」